

Building lifestyle around Ferrari

平成の終わりを前に今想ふこと

30年間続いた平成の時代、その約2/3をクルマ雑誌の出版人として過ごすことができた。
今回は、しばしの自分語りにお付き合い頂ければ幸い。



19 97年、ネコ・パブリッシングに入社した。クルマ雑誌の編集者になりたいと夢見て、大学時代に某クルマ誌の編集部にはバイトで潜り込んだが、半年後、当時の編集長が「バイトはいらない」といきなり宣言し、バイト帰りに愛車フィアット・ウーノ・ターボの車中でPHS越しにクビを宣告された。その話を直後の面接でしたからかどうかは定かでないが、ネコ・パブリッシングの内定がでた。内定を自宅からの電話（PHS）で知ったのは、友人たちとの旅行で広島に行った帰りになぜか立ち寄った、宝塚歌劇団のホール前だった。落ちていたら地元千葉のディーラーで、たぶんクライスラーを売っていた。内定辞退のためその会社の人事部の方を訪ねたら、「3年で店長を任せる予定だったのに、残念だったね」と言われた。それが本当なら、今頃は新型ジープ・ラングラーの販売作戦を練っていたかもしれない。いや、結局イタリア車で、フィアット500Xあたりか？

入社してから一年半は、広告の仕事をした。クルマだけでなく、アウトドア系の営業も担当。単発で日本酒、化粧品なんていうのもあった。全国の酒蔵に電話したけど、1件も広告は決まらなかった。資●堂の広告代理店では、発売日を伝えたら5秒で席を立たれた。

ある日、カー・マガジン編集部には欠員が出て急遽異動となった。いろんなことがわからなすぎて、ひととおりの失敗は全部した。会社に4泊したのは今となってはいい思い出だ。その半年後、ROSSO編集部が社外から社内編集になり、人員が欲し

いということでもまた異動になった。スーパーカーは全く詳しくなかった。フェラーリは好きだけど、専門知識はほとんどなかった。幸運なことに、360モデナ以降の最新フェラーリはほとんど触れることができた。でもその編集部には足かけ15年いるとは思わなかったし、その途中で3年間編集長を務め、その途中でSCUDERIA編集部との掛け持ちになったり外れたりした時期がありつつ、2011年にまさかその雑誌の編集長になるなんて……。なお2014年には古巣カー・マガジンにも復帰し、副編集長を兼務。ニュースサイトの運営をした時期もあれば、今は年2回発売している2ストロークバイクのムックもプロデュースしている。ちなみにバイクの免許は持っていない。

クラシック・フェラーリが表紙を飾ったのは、No.113以来のことだ。今回は素晴らしい250GTルツンに出会い、ちょうど新車の谷間の時期ということもあり、久々のクラシック特集を企画させて頂いた。巻頭特集に関係ないところでも、「クラシック」がキーワードとなっている記事も多いので、そういった目線でも楽しんで頂きたい。

平成30年間のうちその約2/3をクルマ雑誌の出版人として過ごせたのは、例え入社した1997年が出版業界のマイナス成長に陥る最初の年だったとしても、夢を叶えたという意味では幸せなことだ。クラシックに「古典」以外の意味があるのはご存知かと思うが、その中のひとつに「定番」がある。定番だからこそ長く生き残り、愛され続けるのだ。1995年創刊の本誌が本当の意味で「クラシック」となるためには、今後何をすべきか。まずは今自分が置かれた環境に感謝しつつ、そして偉大なるクラシック・フェラーリにあやかりつつ、平成の次の時代に相応しい「NEXT SCUDERIA」を考えていきたい。

